

(一) 帝都にて

「申し訳ありませんが、本日は満室でございまして……」

彼が受付に立つと同時に、一分の隙もなく整えた服装のホテルマンが、完璧な営業用の微笑と共に、いかにも残念そうに言う。シュロスホテル・アム・カイザープラーツ、旧帝都でも指折りの高級ホテルに、今の自分の服装は余りにも相応しくないか……と彼は自らの装いをあらためてみる。前の仕事のスケジュールが押していて、旧帝都への最後の直行便に飛び乗ったのが一〇数時間前。オーデイン宇宙港に降りる前に服装を改める時間はあると言えばあったのだが、何よりも気分的な余裕がなさ過ぎた。結局、仕事を上がるときに着込んでいた作業服のまま、ホテルまで車を乗り付ける羽目になった。

「確かに夜遅くに済まねえな、連絡を寄越してる暇もなかった

し……」

言いながら、彼は作業衣ジャンパーの内ポケットを探り、カードを差し出した。怪訝な表情で受け取ったホテルマンの表情が、カードを一瞥するなり一変する。何の変哲もないカードである。その一面に小さく刻まれた黄金の有翼獅子の刻印を除けば。

「大変に失礼を致しました。アラヌス・ザイデル……退役大尉……さま、でいらつしやいますね。お部屋はご用意させて頂いております」

「さまって呼ばれるほどの身分じゃないが……悪いな」
カードを処理端末に通し、スクリーンの上に軽く指を走らせたホテルマンが、恭しくカードを返して寄越すと、自ら小走りにカウンターを走り出て彼の案内に立った。

ほんの二週間ほど前に、予告もなく届けられたカードの送り主の

名は、帝国大公ジークフリード・キルヒアイス元帥。カードは、彼……アラヌス・ザイデル退役大尉に対する戦没者慰霊祭への出席を要請するメッセージを伴っていた。

メッセージは出席拒否の選択肢を許していた。最初、出席を断ろうかと思った。慰霊祭ゆえ、華やかすぎる式典というわけではない。死者は悼まれ、偲ばれなければならないと思う。しかし、何か違う。何がどう違うのかを言葉に出しては言えないものの、来賓などという立場で出席するのは違う。そう思わずにはいられなかった。

欠席の回答をすべく超^F光速通話^T_Lの端末に向かったときだった。これも不意打ちのように入った超^F光速通話^T_Lが、彼の出鼻を挫いたのだ。『お久しぶりです、伍長』

スクリーンに現れたのは、いかにも学者然とした、ただし、まだその道の権威と言われるには何十年も早いと言われそうな若者の姿だった。

「ああ、久しぶりだな。元気でやってるのか、シュミット一等兵」
『ええ、おかげさまで、なんとか研究を続けさせてもらっています……それで、伍長……』

「ひよつとしてお前ところにも届いたのか、この……」

一見、何の変哲もない電子カードにしか見えないそれを、彼はかざして見せた。応じて、スクリーンの中のシュミットも、両手に捧げ持つようにしてカードを示した。

『出ますよね、伍長？』

「ん？」

『その……シュミット大佐から、その……連絡があつて、伍長が、ひよつとしたら欠席されるんじゃないか……と』

「相変わらず、お節介な人だ……そうか、大佐になったんだな、あの。そいつあ、よかった」

シュミット大佐……彼が帝国軍を退役し、今の仕事に就いた時

の、彼にとっては軍で最後の上官だった。そして、あの戦いを共にし、あの戦場から共に帰還した戦友カメラードの一人でもある。

『経緯いきざつは大佐から聞きました。ええ、ドイツやコリントからも……です』

「あいつらも招待されてるのか」

『ええ、全員だそうです。『ハーメルン』の搭乗員だけじゃありません。『エルムラント』、『ヘーシュリツヒ・エンチェン』、『ノルデン』、『タンホイザー』……生き残りの搭乗員達は一人の例外もなく全員が招待されています』

「そうか……まあ、あの人ならそうだろうな」

『伍長……あの方々の前に、誰が俺たちの素性を聞いてくれましたか？俺たちの為に怒ってくれました？俺たちの為に、同じ士官に銃を向けてくれたし、俺たちを……』

「もう良い、シュミット。俺だって、皇帝カイザーや帝国大公に意趣を持つ

てるんじゃねえ。あの戦いさえなかったら……な」

『確かに慰霊祭なんて開いたところで、死んだ者たちがかえってくるわけじゃないです』

シユミツトの口調が微妙に変わり、彼……アラヌスは眉を上げた。

『旧王朝の時代も慰霊祭だけなら毎年行われていましたし、あの頃の皇帝だって、一応、涙は流して見せてましたしね……ですけど、俺は信じてます。あの人は目薬なんて必要としない。本気で、死んでいった者たちを悼んで、泣いてくれます。皇帝^{カイザー}だって、お元氣なら必ず、俺たちと一緒に涙を流してくれる……伍長、泣くくらいなら、馬鹿な戦いなんかするなって言うのは無しです』

一応、学者の卵である以上、一般教養として歴史学の端っこくらいは嚙っている……シユミツトはそう言って、苦笑する形に眉を歪めた。あるいは泣き出しそうになって、それをこらえたのかも知れない。

『歴史ってそういうものじゃないですか。皇帝カイザーが病に倒れられることがなかったら、ロイエンタール元帥は叛しなかったかも知れない。

帝国大公が新領土に関わりすぎることなく、新帝都フエザーンにいれば、やっぱりロイエンタール元帥の叛乱は起きなかったかも知れない……でも、現実とは違いますよね。現実起きてしまったことを、俺たちは否定できないし、それを食い止められなかったって言って、皇帝カイザーや帝国大公を責めることはできない。どうしようもない歴史の流れって奴は本当にあるんですよ』

「いいよ、わかった。そんな言葉を山積みにするこたあねえよ、シュミット」

『じゃあ？』

「俺も久方ぶりにお前たちに会いたいし、シャミツソー大佐やインマーマン少佐にも、もう一度会っておきたいからな……ただ——」

『……リーゼル……さんですか？』

その名を、シュミットは言い辛そうに口にした。

「ああ」

指先にくるくるとカードを弄びながら、アラヌス・ザイデルは顔を歪めた。畏れ多くも皇帝陛下の紋章を刻印したカードを、ゲーム用のカードよろしく弄んでいたのでは不敬の罪に問われるか……とも思う。無論、あの人が、^{キルヒアイス}そんな些細なことを咎めるような人物であるはずもない——と思い、アラヌスは大きく息を吐いた。

「なんだ、俺も結局は信じてるってことだな」

スクリーンの中で、シュミットがようやく笑顔になって頷くのが見えた。ただ、声は来なかった。彼が返答などを求めていることを察していたに違いない。

「リーゼルに許可をもらったら出席する。大佐たちにはそう伝えてくれ」

『分かりました……お会いできるのを楽しみにしています、退役大

尉殿』

「俺もな、シユミット講師殿」

講師なんて『殿』と呼ばれるほど偉くないんですよ。単なる使いっ走りです……そう言つて、シユミット……現在は帝国軍艦政本部の航空研究所天体物理学研究室に勤務する若き研究者である……からの通信は切れた。

案内された部屋は、さすがに最高級スイート・ルームとはいかなかったが、まずは最上級に属するダブル・ルームだった。テーブルの上では、既に夜半に近い到着にもかかわらず、たつぷりと氷を詰めた銀のバスケツトの中でワインが冷えていた。部屋の中は埃一つなく整えられ、ベッドのシーツにも皺一つ寄っていない。

案内してくれたホテルマンにチップの帝国マルク札を渡そうとしたが、やんわりと断られた。一瞬、自分のような人間からチップな

ど受け取れないという意味かとも思つて血が上りかけたが、『既に政府から十分の手当を頂いております』と応じられて納得した。

納得はしたが、結局、札は無理に握らせた。

「俺が感謝したいんだから、受け取ってくれよ」

そういうと、今度は儀礼だけではない微笑が返ってきた。

「ありがとうございます。ありがたく頂戴いたします」

何か軽食をお持ちしましょうか、と問われて初めてかなりの空腹であることに気づいた。

「まだ、開いてるレストランかバーがあれば、そっちの方が気楽だな。こっちのワインは、また別途楽しませてもらうとして」

最上階に終夜営業のラウンジがあり、軽食も供されるとの返事に、アラヌスは軽く頷いた。

「眺望も最高と自負しております。オーデイン全市街の夜景を一望する眺めは一見の価値がございます」

「じゃあ、あとでラウンジに行かせてもらうか。ありがとうよ、もう下がってくれて良い」

再び恭しい一礼と共にホテルマンが部屋から下がっていく。その背を見送ってから、アラヌスは部屋のカーテンを左右に大きく開いた。地上二五階、現皇帝ラインハルトがリップシュタットの戦役で権力を掌握して間もなくに着工された新棟は、北遙かに新無憂宮ノイエ・サンスーシのジュート・ガルテン

南苑を望む。臣下が皇帝の居城を眼下に望むなど、ゴールデンバウム王朝時代にはあり得なかったが、ローエングラム王朝下ではすでにそれが普通のことになっている。新帝都でも、皇帝の新居城フエザーンルーヴェンブリュン

獅子の泉宮を見下ろすような建築は普通に認められていると聞く。

かつて不夜城とも呼ばれた新無憂宮ノイエ・サンスーシも、六六平方キロにも呼ぶ広大な敷地の過半が闇に包まれている。いまだ多くの建物の窓から光が漏れているのは、なお帝国政府の多くが置かれている東苑オスト・ガルテンで

あり、そのごく一画のみが光の中に浮かび上がっているのが、カイザー皇帝
ズヴァルト病棟のある ジュート・ガルテン南苑である。カイザー皇帝ラインハルトは、なおその身を
蝕む皇帝病との闘いを続けている。

そして、帝国大公ジークフリード・キルヒアイス。病中の^{カイザー}皇帝ラ
インハルトの事実上の代行者として、この広大な銀河帝国を一人で
支えているのが、あの感じの良い赤毛の若者なのだ。

「変われば変わるもんだな……あの、坊やたちがなあ」

ため息は、今、『赤毛の坊や』が肩に負っているものの重さを我が
身に負うことを考えたときに感じた途方もない疲労感からだった。
全人類約四〇〇億。それだけの人間の命運をただ一人で担うなど、
まさに正気の沙汰ではない。だが、あの若者は……若者たちは、『未
成年だから酒は飲めないのだ』などと頬を赤らめていたあの歳にし
て、すでにその覚悟を定めていたのだ。

胸の奥に蟠っている重い何かを、アラヌス・ザイデルはため息と共

に吐きだした。

熱いシャワーを浴びて着替えるころには貯まっていた澱のような疲労が全身に広がってくるような気がして、いつそのまま眠ってしまおうかとも思う。式典は明日の正午から。一〇時に服装……着用する機会など来るまいと思っていた大尉用の第一種礼装をわざわざ引つ張り出して、このホテルに送る羽目になった……を整えておけば、軍務省から出迎えの車が差し回されてくるというのだ。このまま眠ってしまったとしても、間に合うようにホテルがよろしくやってくれるだろう。

そうは思ったが、やはり最上階のラウンジで供されるという酒と軽食の魅力が、この時は眠気を上回った。

「しようがねえな、ひとつ、軽く飲ってくるか」

眩き、アラヌスは持参した着替えの中から、最もこざっぱりしたジャケツトを手にとった。

ラウンジからの眺望は、確かに最高だった。旧帝都は旧領土最大の都市であり続けている。帝都がフェザーンに移った今でも、オーデイン市そのものは、旧領土統治の中枢として、衰退するどころか、なお繁栄と拡大を続けている。人口数百万を優に超える巨大都市の夜景が一望の下に広がっているのは、確かに一見の価値ありというものだった。

最上階のフロア全面を使った広大なラウンジは、既に深夜と言うこともあって、埋まっている席は四分の一もなかっただろう。案内されて着いた席の居心地は良く、『腹が減ってるんだ、何か、あまり重くないので美味しいものを食わせてくれ。それと黒ビールを大ジョッキで頼む』などという、アラヌス自身が思うに場末の居酒屋で出すようなオーダーにも、ウェイターは快く応じてくれた。運ばれてきた塩味とレモンの風味の効いたパスタの前菜は、ウエ

イターの言葉通り美味かった。大ジョッキの黒ビールで咽喉の奥に流し込み、満足の息を吐く。『ハーメルンロ』や、その後により組んだ駆逐艦や巡航艦……戦艦や航空母艦の搭乗員になる機会は遂になかった……の狭苦しい通路や船室、複雑に入り組んだ核融合機関の隙間を縫うようにして点検と整備、そして修理に走り回っていた機関室がフラッシュバックのように脳裏に浮かんでは消えた。

「これが……平和ってやつですかい。平和に乾杯つてところですか、皇帝陛下、帝国大公閣下」

重いジョッキを不器用に掲げ、乾杯のポーズを取ってみる。

「乾杯——」

澄明な響きと共に、そのジョッキにグラスが軽く打ち合わされた。
「ん——!？」

驚いて、身を預けていたソファから身体を起こしたアラヌスは絶句して、そのまま硬直した。